

日本の大学入試に対する 海外就学経験者の認識 —帰国生入試を事例として—

井田 頼子

東京大学大学院教育学研究科博士課程

【目次】

I 本研究の射程

1. 目的
2. 日本の大学の帰国生入試について
 - (1) 制度上の設定
 - (2) 帰国生入試に関する制度的変遷
3. 先行研究と本研究の位置づけ
4. 調査方法

II 分析結果

1. 帰国生入試が必要である理由
 - (1) 教育体制の差異
 - (2) 言語力
 - (3) 評価方法
 - (4) 教育体制の類似
2. 帰国生入試への批判的視座
 - (1) 入試システム
 - (2) 選抜方法
 - (3) 筆記試験科目
 - 1) 小論文
 - 2) 英語
3. 帰国生入試における改善案

III 本研究の意義と限界

【キーワード】

大学入試改革、海外就学経験者、帰国生入試、能力、
塾

I 本研究の射程

1. 目的

本稿の目的は、日本で大学入学者選抜（以下、「大学入試」）の改革とグローバル化への戦略が進められている状況下で、海外就学経験者⁽¹⁾といった、国外のカリキュラムによる多様な教育経験を有する受験当事者に着目し、入試に対する彼らの認識を明らかにすることにある。具体的には、海外就学経験者のうち、帰国生を対象事例として、個々人の受験経験に関する語りをもとに、彼らが日本の大学入試をどう認識しているのか、どのようにとらえているのか、という点を明らかにする。

1990年代以降、日本では大学教育改革やグローバル化への戦略の実践とともに入試形態が多様化している。例えば、自己推薦入試（アドミッション・オフィス入試、以下「AO入試」）、教育課程に焦点を定めた国際バカロレア・ディプロマプログラムのカリキュラムならびに最終試験による成績が審査基準とされる、国際バカロレア入試⁽²⁾などがそれに該当する。

入試が多様化することによって、海外の多様な教育課程のもとで学んできた者が日本の大学入試を受験しようとしたとき、彼らにとって選抜方法の選択肢が増えているのは確かであろう。しかし、そうした状況のもとで、実際に受験する帰国生当事者が入試そのものをどう認識しているのか、ということについては明らかにされていない。

本稿では、受験する当事者というミクロレベルの現状に焦点を定めて、彼らが日本の大学入試をどのよう

に認識しているのかを明らかにする。その際に、国レベルで特別選抜方法として導入されて30年以上が経過する帰国生入試の受験経験者を一事例とする。

2. 日本の大学の帰国生入試について

(1) 制度上の設定

まずは、日本の大学入試のうち、帰国生を対象とした大学入試の制度上の位置づけを確認しておきたい。毎年度文部科学省から各国公私立大学に通知される「大学入学選抜実施要項」（以下、「実施要項」）（平成27年度）では、「第3 入試方法」という項目において日本の大学入試の種別が整理されている。そこでは、(1)「一般入試」のほか、入学定員の一部を対象とした入試として、(2)「多様な入試方法」の実施も求められている。(2)「多様な入試方法」とは、「アドミッション・オフィス入試」、「推薦入試」、「専門学科・総合学科卒業生入試」、「帰国子女入試・社会人入試」の四種類で構成されている。

なお、本稿での「帰国生入試」は、(2)「多様な入試方法」のうち「帰国子女入試」が該当するが、制度上ではその定義が明確には定められていない。実際に大学（学部・学科）によっても入試の名称や選抜方法は多様であり（井田 2015）、帰国生を対象者に含めてAO入試として実施するところもある。本稿では制度ではなく受験当事者を対象者としていることから、海外就学経験があり、帰国して日本の大学進学希望者を対象とした大学入試という総合的な意味で「帰国生入試」という名称を用いることとする。

(2) 帰国生入試に関する制度的変遷

次に、国内の入試体制や政策における帰国生入試の位置づけについて、その変遷を整理しておきたい。

日本の大学で帰国生を対象とした入試がそもそも導入に至った背景には、1960年代以降の日本の高度経済成長期における企業の海外進出という社会的潮流があった。海外駐在員である親の同伴者として渡航し、現地校やインターナショナルスクールで教育を受けてきた者が増加した状況をうけて、国レベルで選抜方法が検討されたのである。当時の「実施要項」に記載さ

れていた入試は、一般入試や推薦入試といった、日本の教育課程を経た者の入試方法のみであった。帰国生が日本の教育課程を経ていないことから、たとえ海外の高校を優秀な成績で卒業しても、教育内容が日本のそれと異なるため「共通一次試験体制で高得点をとることは至難の業である」（松原 1980）という指摘を始め、中教審（1974年）、研究協議会⁽³⁾や国会での議論⁽⁴⁾を経て、1982年度以降、一般入試や推薦入試と区別された「帰国子女入試」が「実施要項」において確立したのである。選抜方法は、学力検査の免除又は負担の軽減を図り、小論文や面接などを重視するといった「特別選抜」という措置であり、「救済策」や「積極的差別是正策」（佐藤 2005）とみなされていた。

しかしその後、1993年の大学審議会答申「大学入試の改善に関する審議のまとめ」において「評価尺度を多元化・複数化し、受験生の能力・適性等を多面的かつ丁寧に判定する」という提言のもと、実施要項において「帰国子女入試」は、先述した「多様な入試方法」の一選抜方法として位置づけられた。つまり、「帰国子女入試」は、国によって導入された1982年度当初は、日本の教育課程を経ていない者の「救済策」であったが、その後、国内全体の入試体制改革の影響にともなって「多様な入試方法」の一つとして位置づけられたのである。実際、特にAO入試には、日本の教育課程に基づいた学力試験を必ずしも実施しない場合や帰国生も対象者に含まれる場合があった。その意味で、帰国生の入試方法の選択肢が広がったことが特徴として指摘できよう。

さらに、1980年代以降、国際化やグローバル化が政策のキーワードとなり、大学に対して帰国生の積極的な受け入れが促されてきた。例えば、「豊かな国際性を身に付けた日本人の育成という観点から、外国での学習・体験等を評価し、その能力・特性等を保持伸長する」入試方法として推進されたほか⁽⁵⁾、帰国生を「国際感覚や高い語学力を有する優れた学生」ととらえ、彼らの「海外経験を評価する入学試験制度」の推進が明言された⁽⁶⁾。つまり帰国生入試は、海外経験の評価といった、いわば「国際化・グローバル化」への対応策において実施が求められてきた入試でもあっ

た。

このように、帰国生を対象とした入試は、国レベルで「救済策」「多様な入試方法」「国際化・グローバル化」の三点がキーワードとなって制度的位置づけがなされ、現在に至っているのである。

こうした背景をふまえたうえで、本稿では受験当事者によって帰国生入試がどう認識されているのかを明らかにすることとする。

3. 先行研究と本研究の位置づけ

これまで帰国生入試に関する研究では、大学の入試体制（佐藤 2005）、大学の実施状況（稲田 2011）、入試対策を提供する塾での実情（井田 2013）に着眼点が置かれ、入試体制の課題が指摘されてきた。入試体制について佐藤（2005）は、大学が公正さを重視するために共通筆記試験という客観的な選抜方法が採用されるが、それにより「正当な帰国生（「欧米の現地校ないし国際学校に通学していた、英語が堪能で、積極的で自己表現の上手な生徒）」と、「そうでない帰国生」といった二者の差異化が引き起こされることを問題視している。また、稲田（2011）は、帰国生の海外経験がどのように評価されているかは不明瞭だと指摘している。これらの研究では大学・学部の実施状況から知見・考察が導きだされているため、本稿で当事者の目線から得たデータならびにその分析は、その整合性をみるうえで重要だと思われる。また、井田（2012）は帰国生当事者へのインタビュー調査をもとに入試の課題を指摘しているが、知見は出願資格による受験大学・学部の制御が起こっていること（卒業資格・大学入学資格、渡航背景）に留まっており、筆記試験科目などの試験そのものに関する課題は深く言及されていない。

また、帰国生の教育に関する研究では、国民国家、国民社会という枠組みが規定されながらも、現実的にはその枠をこえて教育現象が生起しているという現状から、国民国家を前提に議論するよりも、日常のレベルで生起している教育現象をいかに分析するかが重要視されてきた（佐藤 2010）。こうした問題意識から、これまで制度や体制というマクロレベルでの研究のみ

ならず、フィールドワークやインタビューなどの手法によるミクロレベルでの研究も蓄積されてきた。

しかしながら、着眼点を当事者に設定した研究は重視されつつも、日本の大学の「帰国生入試」という教育現象に照準を定めた研究は進められていない。日本の大学の帰国生入試は、一見すると体制が整備されているようではあるが、グローバル化政策が進む昨今、それを当事者がどう認識しているのかというミクロレベルでの現象は見過ごすことはできないだろう。以上から、本稿では帰国生自身による帰国生入試の認識を明らかにすることとした。

4. 調査方法

本研究では、日本の大学入試に対する帰国生の認識を明らかにするため、海外の高校から日本の大学に進学した帰国生へのインタビュー調査を実施した。実施期間は2010年6月～2012年6月である。

対象者は筆者の知人を介して雪だるま形式で依頼した。実施の際には調査の趣旨ならびに回答は対象者の事由や自主性を優先する旨を伝え、了承を得たうえでICレコーダーで録音した。調査時間は1人あたり1時間～2時間である。

調査方法については、対象者の教育経験が多様であることから、意図的な質問を避ける必要があると判断し、半構造化インタビューを採用した。ただし「基本情報」（日本と海外での幼少期から大学に至るまでの学校歴、海外滞在地・年数、学齢など）については正確さが必要であるという判断から、インタビュー前に筆者が作成した「基本情報」シートに記入を依頼し、その内容を随時確認しながら調査を進めていった。

質問項目は、事前に15問を設定したものを（表1）、対象者に提示したうえで、自由に語ってもらった。質問者の質問や分析・考察の恣意性を避けるため、実施時には「基本情報」と語りの内容に関連性があるかどうか、についてその都度確認を行なった。

本稿での主な分析データは、調査時の質問項目（10）「日本の帰国生入試についてどう（思う）思ったか。」という質問に対する彼らの回答である。なお、質問時に「なんでもいいですか？」という確認があった場

<表1> 質問項目リスト

	質問項目 (15問)	補足説明
1	海外の高校での教育について、どう思うか。	授業形態、宿題、生徒の様子など
2	海外に滞在中、補習校に通学していたか。	
3	海外に滞在中、塾・家庭教師で勉強していたか。	
4	高校卒業／大学入学資格とスコア	単位取得、IB、GCE、B、SAT、AP など
5	4について (選択可能な場合) 取得した理由	
6	語学力について スコア・取得年	TOEFL、IELTS など
7	帰国を決めた理由	
8	なぜ、帰国後に塾に通おうと思ったか。 塾での授業について、どう (思う) 思ったか。	※該当者のみ
9	受験した大学・学部・入試科目・入試形態	
10	日本の帰国生入試について、どう思うか。	
11	大学での教育について、どう思うか。	授業形態など
12	大学生活について	学内外の活動 (部活、ボランティア活動など)
13	将来の希望職種、企業名など	
14	将来の希望居住地	
15	その他	教育以外の海外での経験など

合、「なんでもよい」ということ、受験前や現在から振り返るなど「思う」もしくは「思っていて、現在も思っている」「思っていたが、考えが変わった」など、時系列上どの時点でもよいことを口頭で伝えた。具体的に設定しなかった理由は、先行研究で入試体制について批判的な指摘が出されているが、当事者たちによって入試のどの点に着眼点が置かれているかという実状を知るうえで適した質問方法だと判断したためである。よって、調査・分析の際も同様、当事者が入試について「なに」に着眼点を置き、それについて「どのように」考えたのかを具体的にすくい上げるという立場を取ることにした。なお、別の質問項目において入試対策や入試に関する回答を文字化したデータから抽出した場合は、その語りも分析対象データとした。そのうえで、計21名 (男8名・女13名) 分の入試に関する語りを今回の分析データとした。

対象者の概要は、表2に整理している。帰国生入試による入学者数を参照すると⁽⁷⁾、今回の対象者の進学先のうち、国立2大学 (対象者4名)、私立8大学 (対象者14名) は、帰国生入試による進学者数の上位20位の大学である。また、今回の対象者の進学先は都市部 (東京、神奈川、愛知) の大学であり、これは入

学者が都市部の大学に集中しているという指摘 (高崎 1993) と合致していることから、今回の対象者は、当事者の認識をとらえるうえで適切であると判断した。

以上の調査・分析方法をもとに得た分析結果を、次章で論じることとする。

II 分析結果

日本の帰国生入試について、今回の対象者は、その全員が、帰国生入試は必要だという立場にたっていた。そこからさらに語りの内容を、1. 「帰国生入試が必要である理由」、そして帰国生入試自体は必要ではあるものの改善の余地がある点や困った点などを指摘した語りとして、2. 「帰国生入試への批判的視座」、そして3. 「帰国生入試における改善案」とに大別した。以下では、これら三種類に分類した内容を語りとともに順に論じることとする。なお、調査の対象者はインフォーム番号で表記している。データの下線部分と括弧内の補足説明は筆者によるものである。表内の「備考」欄には、(10) 「日本の帰国生入試についてどう (思う) 思ったか。」以外の質問に対する回答であった場合の質問項目を記載している。

<表2> インフォーマント基本情報

No.	性別	年齢	滞在地 (就学時)	滞在地 (高校修了時)	単身 留学生	学校種 (高校)	大学入学 資格など	入試 種別	入試科目	大学 (国・私)	学部 (学科)
1	女	19	愛	愛	○	私	LC	帰国	書類・小論文・面接	国	経済 (国際経済)
2	女	20	印	印		IS(英)	GCE-A	帰国	書類・小論文・面接	国	経営 (国際経営)
3	女	25	英、米	米		公	SAT	帰国	書類・小論文・英・面接	国	経済 (経済)
4	女	23	米、独	独		IS	IB	帰国	書類・小論文・面接	国	生活科 (人間生活)
5	男	20	墨	コ		IS	単位	帰国	書類・小論文・面接	国	経営 (経営)
6	女	18	墨、米	日(高3・9月~)		公・私(日)	SAT・単位	帰国	小論文・英・面接	国	法 (法・政治)
7	男	23	加	加	○	IS(加)	PE	帰国	英・国・面接	私	商 (経営)
8	女	21	加、愛	愛		IS(米)	IB	帰国	英・国・面接	私	人間科 (人間情報)
9	男	23	英、仏	仏		公	B	帰国	英・国・面接	私	人間科 (人間環境)
10	男	22	新	新		IS(加)	単位	帰国	書類・小論文・面接	私	法 (法律)
11	男	19	台、米	米	○	私	SAT	帰国	小論文・英	私	法 (法)
12	女	19	豪	豪		私	QCS	帰国	小論文・英・面接	私	教育 (教育)
13	男	24	豪	豪	○	公	QCS	帰国	英・国・面接	私	商 (経営)
14	女	32	独、仏	仏		IS(英)	IB	帰国	書類・面接	私	文 (人文社会)
15	女	21	米、香	香		IS(加)	OSSC	帰国	書類・小論文・面接	私	文 (人間科)
16	男	22	英	英		私	GCE-A	帰国	英・国・面接	私	商 (商業・貿易)
17	男	19	豪	豪		私	IB	帰国	英・面接	私	経済 (経営)
18	女	18	米	日(高2・4月~)		私・私(日)	単位	AO	書類・英	私	国際教養
19	女	22	英	英		公	GCE-A	帰国	小論文・英・面接	私	経営
20	女	20	仏	日(小5~)		私(仏)	B	AO	書類・小論文・面接	私	文 (ドイツ文)
21	女	24	豪	豪	○	公	単位	一般	英・数・理	私	歯 (歯)

※ No. はインフォーマント番号、年齢はインタビュー調査時。

※ 国ならびに地域名の表記：新 (シンガポール)、愛 (アイルランド)、墨 (メキシコ)、コ (コロンビア)、台 (台湾)、香 (香港)

※ 高校学校種の表記 (例)：IS (英) = International School (イギリス系)、私 / 公 = 私立 / 公立、私 (英) = 私立 (イギリス系)

※ 卒業資格・学力検査：LC (Leaving Certificate、愛)、GCE-A (General Certificate of Education - Advanced、英)、SAT (Scholastic Assessment Test、米)、IB (International Baccalaureate Diploma、加盟学校)、PE (Provincial Examination、加 / プリティッシュ・コロンビア州)、B (Baccalauréat、仏)、QCS (Queensland Core Skills Test、豪 / クィーンズランド州)、OSSC (Ontario Secondary School Certificate、加 / オンタリオ州)

※ 「入試枠」「入試科目」「大学 (国・私)」「学部 (学科)」については、彼らが受験した複数の大学・学部のうち、結果的に進学した大学・学部に関する情報である。進学先に限らず、対象者全員に帰国生入試の受験経験、もしくは受験を検討した経験がある。

(1) 教育体制の差異

1. 帰国生入試が必要である理由

本節では、インタビュー調査のデータをもとに、帰国生入試が必要であると当事者が判断する理由について項目別に説明する。具体的には、(1) 教育体制の差異、(2) 言語力、(3) 評価方法、(4) 教育体制の類似、である。(表3)

帰国生入試が必要である1点目の理由として、教育体制の差異が挙げられていた。例えば、イギリスのGCE-A レベルで高校課程を修了したNo.19は、日本と海外の高校でのカリキュラムの差異に言及していた。

科目の面では、ありがたかったです。「5教科」(現代文・数学・理科・社会・英語) っていう分け方だと無理です。(No.19)

また、No.10は、カリキュラムの内容まで掘り下げ、

<表3> 1. 帰国生入試が必要である理由

項目	語り	備考(質問項目)
教育体制の差異	科目の面では、ありがたかったです。「5教科」っていう分け方だと無理ですし。帰国生入試は必要だと思うんですよ。(No.19)	
	日本で習うことを試験問題にすると・・・例えば、「歴史とか社会の問題にしましょう」ってなったら、それを受けていなくて、海外にいたのだから、「帰国生入試」じゃないですよ。[小論文と面接で、現状維持でいいんじゃないかな]って思いますね。(No.10)	
言語力	自分はずっと海外に住んでて、英語はできるんですけど、日本語は不自由していたので、(この入試形態は)いいと思いましたね。(No.16)	
評価方法	(大学で同じ)クラスの半分ぐらいの子達が、その(学力試験の)成績だけじゃなくて、面接とか、自分が高校時代にやってきたことを評価してもらって入ってきた子達なんですね。なので、すごく個性的な子達が多くて。その、入試で、内面的な部分を評価してるので、そういうところはすごく良いんじゃないかなって(思います)。(No.4)	
	海外の学校の成績を見てくれるし、小論文と面接できちんと見てくれるし。いいと思います。(No.19)	
教育体制の類似	小論文は、大好きです。(塾での)小論文の授業は、フランスの教育の延長だった。(No.9)	(8) 塾での授業について、どう(思う)思ったか。
	自分で考えることは慣れてましたね。(塾での)ディスカッションとか、比較的アメリカに近かったなと思います。(No.3)	
	一般(入試)で受かった人とかは、例えばセンターで何科目で受けたとかいう話になって、そういう時に、「帰国(生入試)ってどうなの?」って聞かれて、「面接と小論文だったよ」って言ったら、「ええ?楽勝じゃん!」って、批判される傾向にあるんですけど、こっちからしたら、小論文書くこと自体が難しいことじゃないですか。習ってないんで。(No.10)	

「日本で習うことを試験問題にする」ことに疑問を抱き、「海外にいたのだから、(略)小論文と面接で、現状維持でいい」という結論に至ったという。これらの語りは帰国生入試導入当初の理由や背景と一致していると言える。つまり教育体制の差異という点で、当事者が帰国生入試を救済措置として認識していたことが読み取れる。

(2) 言語力

帰国生入試が必要である2点目の理由として、言語力が挙げられていた。No.16は幼少期から高校卒業までイギリスで生活していたことから、英語の方が得意だと感じていたという。

自分はずっと海外に住んでて、英語はできるんですけど、日本語は不自由していたので、(帰国生入試は)いいと思いましたね。(No.16)

インタビュー時の彼の日本語には特に問題はなく、日本企業での就職も決まっていたため、「不自由」というのはあくまで彼の自己判断だろう。「英語はでき

る」という点で国レベルでのグローバル政策と合致しているが、他方で日本語力の観点でいえば、彼にとって帰国生入試は救済措置であったことが読み取れる。

(3) 評価方法

帰国生入試が必要である理由の3点目として、評価方法が挙げられていた。例えばNo.4の進学先には推薦入試など学力以外の試験で入学してきた学生がクラスの半分を占め、皆個性的だったという。

入試で、内面的な部分を評価してるので、そういうところはすごく良いんじゃないかなって(思います)。(No.4)

彼女のいう、「内面的な部分」とは、学力試験など点数として外部に表出される能力と対比させた能力であり、「個性」として表出されるものを示している。この「個性」を重視するという点で、帰国生入試の評価方法を肯定的にとらえていた。帰国生の能力の測り方、そして評価の方法といった観点から、帰国生入試が必要だと結論づけているのである。

(4) 教育体制の類似

帰国生入試が必要だと判断できる語りのなかで、高校での教育や試験の方法が類似していたことも挙げられていた。No.3とNo.9は塾での入試対策の授業を例として、「自分で考えること」やディスカッションによって考えを深めていくことが、「フランスの教育の延長だった。」「アメリカに近かった」という。

小論文試験はそもそも、学力試験の代替策として帰国生入試に組み込まれることとなった試験である。No.10が「小論文を書くこと自体が難しいことじゃないですか。習っていないんで。」と語っているように、これはすべての帰国生の共通事項ではないものの、海外の高校と日本の大学入試といった教育体制が類似している場合もあることが明らかになった。

以上、本節では、帰国生入試が必要であるという直接的な理由について、(1)教育体制の差異、(2)言語力、(3)評価方法、(4)教育体制の類似、の順に論じた。帰国生入試は、教育体制や言語面で救済措置として当事者から求められているとともに、評価方法そのものや、場合によっては教育体制が類似していることから、肯定的にとらえられていた。

しかし他方で、帰国生入試は必要であるという立場にたったうえで、入試そのものに対して批判的な視座も投げられていた。次節では、2.「帰国生入試への批判的視座」について、より具体的な語りをもって当事者による帰国生入試の認識を論じることとする。

2. 帰国生入試への批判的視座

分析結果として大別した項目の2つ目、「帰国生入試への批判的視座」について、(1)入試システム、(2)選抜方法、(3)筆記試験科目、に分類し、語りをもって順に論じることとする。

(1) 入試システム

ここでの入試システムとは、入試の実施状況や出願資格といった、入試に関する包括的システムを指している。今回の分析では「入試システム」をさらに、①実施の有無、②入試の時期、③滞在年数、④高校の地理的条件、⑤渡航理由、の5点に類型化した。(表4)

帰国生入試では、大学(学部・学科)によって異なる選抜が実施されているのだが、入試システムに分類した1点目として実施状況に関する語りが確認できた。No.21は今回の対象者のうち、唯一理系の学部に進学した者である。

一番困ったのは、帰国子女入試が(実施される大学のうち)、理系が少なかったことですね。(No.21)

彼女は、志望していた学部が帰国生入試を実施していなかったため、1年間予備校に通い、一般入試でその学部に進学したという。実際に帰国生入試を実施する理系(医学系、機械工学系、自然科学系など)の学部は、入学者数の上位校においても少ない。つまり専攻によっては、日本のカリキュラムでの教育経験者と同じ試験を受ける必要があるという点で、不利な状況に置かれる可能性があると言える。

2点目は、入試の時期である。「実施要項」においても一般入試等とは異なり、帰国生入試の実施時期は大学に一任されている。最も早い入試は9月に実施されているため、不利な状況に置かれる者もいる。その一例が、11月に修了するオーストラリア等の高校の就学者である。No.13は、志望大学を受験するにあたって数日間一時帰国する必要があったのだが、単位として認定されないことが告げられ、受験を諦めたという。また、IB履修者は最終試験との兼ね合いも考慮する必要がある。

(オーストラリアの場合、IB最終試験が11月に実施されるため、帰国生入試をもうちょっと遅らせてほしいですね。(No.17)

このように、高校の教育システムによっては、入試の時期という点で不利な状況に置かれることもある。

3点目は、滞在年数と日本語力である。No.16は、前節で例として挙げたように、自身の日本語力に不安を抱いていた。以下の語りは、そこから湧き起こってきた疑問である。

(多くの大学では、) 確か外国に2~3年いた人は帰国生入試を受けられますよね。それ以外は日本で生活しているとなると、帰国生入試の(受験生の)日本語の(全体平均の)レベルも上がるじゃないですか。(略)日本にいる年数が長いと、)有

<表4> 2. 帰国生入試への批判的視座 (1) 入試システム

項目	語り	備考 (質問項目)
実施状況	一番困ったのは、帰国子女入試が (実施される大学のうち)、理系が少なかったことですね。それは困っちゃいましたね。(No.21)	
入試の時期	アメリカは (6月に) 卒業してから、(同年9月以降に) 入試があるじゃないですか。で、オセアニアは、(同年11月まで) 授業じゃないですか。ゆえに、(高校での授業期間中に) ●大学を受けるには、帰ってこないといけないんです。●大学の入試の前日が、卒業式だったんですよ。で、教頭に「卒業式出ません」ってゆったら、「じゃあ、渡さないよ、Certificate。」って言われて。結局 (受験を諦めました)。(No.13)	
	(オーストラリアの場合、IB 最終試験が11月に実施されるため。) 帰国生入試をもうちょっと遅らせてほしいですね。(No.17)	
滞在年数	中学まで日本で教育を受けて、高校だけ外国にいて、日本の帰国生入試を受けるのはずいんと思いました。やっぱりその、日本で日本語の教育も受けていたので、イギリスに住んでる人に比べると、できるじゃないですか、日本語が。で、イギリスに来て、英語も身についた、と。帰国生入試の英語の問題も、そんな、タカが知れてるので。(多くの大学では、) 確か2~3年外国にいた人は帰国生入試を受けられますよね。それ以外は日本で生活しているとなると、帰国生入試の (受験生の) 日本語の (全体平均の) レベルも上がるじゃないですか。なので、外国にいた年数をもっと短くするか、なんか調整をすればいいのになと思います。(日本にいる年数が長いと、) 有利になるとは思うんですね。自分としては。(No.16)	
高校の地理的条件	私が大学受験の時に直面した問題は、(高校が) 日本にあるからってことで、「日本の学校」って認識されて帰国子女入試が適用されなくて。明らかに、やってること (=カリキュラム) はフランス (のもの) だから、完璧に違うのに、「日本にあるからだめです。」ってことで、受け入れられるところがすごい限られて (います)。だからそういうところをもうちょっと考慮してほしいなって (思います)。もうちょっと、認識してほしいっていうか。(No.20)	
渡航理由	(第二言語を習得していることについて、) 面白いんですよ。言語を学ぶのってそんなに苦じゃないなって。私は文系だなんて。私、(進学先の学部を選択を) 間違ったんですよ。ここしか受けられなかったんです。(筆者：なんで?) 受験資格です。なぜか、単身留学生は、「外国の学校出身者」入試しか受けられないんですよ。「帰国生入試」っていうのは、単身留学生は含まれないんで。それで、(単身でも受験可能だったのが) 経済学部だけだったんですよ。今思えば、「経営の方が面白かったかなあ」とも思うんですけどね。まあしょうがないです。(No.1)	(11) 大学生活について

利になるとは思うんですね。(No.16)

多くの大学では出願資格として、2~3年以上海外の教育を受けてきたことが定められている。彼が言語力に関連づけていたように、海外での滞在年数が何かしらの能力のレベルに影響を及ぼしうる可能性を示唆している。つまり滞在年数が、入試において受験生のなかで有利・不利な立場を生み出しうるのだと言える。

4点目は、高校の地理的条件である。例えばNo.20のように、インターナショナルスクールが国内にあることにより、大学 (学部・学科) によっては入試の出願資格を満たしていないとみなされる。

やってること (=カリキュラム) はフランス (のもの) だから、完璧に違うのに、「日本に (高校が) あるからだめです。」ってことで、受け入れられ

るところがすごい限られて (います)。(No.20)

No.20はフランスの大学入学資格 (バカロレア) を取得しているのだが、教育システムではなく学校の地理的条件によって出願資格が決められていたため、出願先が限定されていた。つまり、学校の地理的条件により不利な立場に置かれるといった、入試システム上での「排除」が起こっていると言える。

5点目は、渡航理由である。近年グローバル人材育成が政策に掲げられ、高校就学時の留学が呼びかけられているが、その一方で、入試体制が追いついていないのも現状である。No.1は、単身留学で海外の高校を卒業しているが、志望先の学部では単身留学生者に出願資格が与えられていなかったため同大学の別の学部を受験したという。

(単身でも受験可能だったのが) 経済学部だけだったんですよ。・今思えば、「経営の方が面白かったかなあ。」とも思うんですけどね。(No.1)

親の仕事の都合か単身留学かといった渡航理由が出願資格に課されている場合、彼女のように出願を諦めるという事例もある。つまり渡航理由といった出願資格により、入試システム上での「排除」が起きていると言える。

以上、本項では分析項目の「2. 帰国生入試において改善すべき点」のうち、(1) 入試システムとして、①実施の有無、②入試の時期、③滞在年数、④高校の地理的条件、⑤渡航理由、の5点に整理した。その結果、これらの要因が、場合によっては帰国生に不利な

影響を及ぼしうること、そして帰国生の「排除」を引き起こしていることが明らかになった。

(2) 選抜方法

次に「2. 帰国生入試において改善すべき点」のうち、(2) 選抜方法に分類した内容として、①海外での業績、②統一筆記試験、③面接、の3点を順に述べることにする。なおここでの「業績」とは、学力に関する成果を意味している。

1点目は、海外での業績である。その例として、海外の教育課程による大学入学資格が挙げられる。日本の大学の帰国生入試では、大学(学部・学科)によって大学入学資格の位置づけが異なっている。例えば

<表5> 2. 帰国生入試への批判的視座(2) 選抜方法

項目	語り
海外での業績	私はIB(のディプロマ)を取ってきているので、(別の受験生が)TOEFLとSATの結果だけで(大学に)入っているのは、(海外での業績への評価が)偏っている気がしますね。(No.14)
	●大学だけなんです、成績重視してくれるところが。それで、もうちょっと、現地のがんばりを認めてくれるところがあったらいいんじゃないかなって(思います)。結局、現地のがんばりよりも、帰ってきてからの、数ヶ月間の受験勉強で(進学先が)決まるのはどうなのかなって思います。(海外で)全然何もやってなかった人が、受かってしまうこともあるし。(No.15)
	(大学によっては、)書類の提出だけってところもありますよね? ああいうのはいいんじゃないかと(思います)。それだったら、「(日本の入試対策ではなく、海外での)IBのスコアで評価されるんじゃないかな。」って思いました。(No.17)
	日本の受験勉強ムリですからね、むこう住んでたら。ぜったい。「むこうでの勉強」が、「受験勉強」になればね、「いいな」って思いますけど。(No.13)
統一筆記試験	「大学受験って、まだ、学力の方が重視されているのかな」って思って。現地校の成績とか、筆記試験とか。「[考え方]」っていうよりは、結局「成績」なのかなって(思います)。(No.19)
	全然、英語力は見られないっていうか。結局(重要なのは)日本語(力)じゃないですか。帰国生入試も。「海外でもうちょっと頑張ろう」っていう気になるかなあって(疑問に思います)。結局日本語(力)なんだったら、「そっち(=海外)の勉強より受験勉強した方がいい大学に入れる」って(いう結論に)なっちゃうと思うんで。(No.15)
	帰国卒の勉強して思ったのが、小論文って、学校によって違うと思うんですけど、一つの議題について書くじゃないですか。(選択不可能な大学の試験を例として)、「それはおかしいな」って。だって、それぞれ好きな分野とか得意な分野とか違うし。いくら授業についていける能力がある人でも、たまたまその内容について知らなかったり、得意じゃなかったりして。「1回で、落としてもいいのかわ？」って思って。(No.18)
	なんか、国や学校によって、すごくその・成績の評価方法とか、やってきたことは全く違うと思うので、やっぱり、いろんなタイプの学生を比べるためにはやっぱり、日本的な、例えば、早稲田とかだと統一試験があるんですけど、ま、そういった統一試験で学力を測るとか、「そういうのは必要なんじゃないかな」って思うんですけど、やっぱり、「結構面接とか小論文とかそういうところを重視して、評価してもらったな」っていう風には感じているので、それはそれで、私は「今の入試方法で、いいんじゃないかな」って(思います)。(No.4)
面接	面接はもうちょっと長くてもいいんじゃないかなと(思います)。すごい短かったです。5分、10分ぐらいです。「それで何を見るんだ？」っていう。なんか、「どこにいたか？」とか、「何してたの？」とか、ざっくりした質問されて。で、「コロンビアでこういうことしてきて、こんないい経験してきました」っていうのを言う前に終わっちゃって。それを話す時間もないうぐらい短かったんですよ。そこをもうちょっと、見た方がいいんじゃないかなって(思います)。(No.5)

No.14が受験した学部の入試では、大学入学資格があくまで出願資格に留められ、合否は筆記試験結果によって判断されていたという。

私はIB (のディプロマ) を取ってきているので、(別の受験生が) TOEFL と SAT の結果だけで(大学に) 入るってというのは、(海外での業績への評価が) 偏っている気がしますね。(No.14)

海外の大学入学資格に関する教育課程ならびに資格取得条件については西村編(1989)、細尾(2010)、望田(1998)、宮島(2003)等が詳しく調査を行なっているため深く言及しないが、ここで注視すべきは、大学の設定するIBとSAT・TOEFLなどの海外の業績の位置づけに対して、受験当事者が疑問を抱いているという事実である。海外の多様な大学入学資格が、日本の大学入試では出願資格として一様に設定されていたことへ批判的な視座が投げられていると言える。

また、No.15は海外での業績を評価する大学(学部・学科)が少ないという現状から、選抜方法に疑問を抱いていた。

結局、現地のがんばりよりも、帰ってきてからの、数ヶ月間の受験勉強で(進学先が) 決まるのは、どうなのかなって思います。(No.15)

彼らの語りから浮かび上がってきたのは、帰国生入試において、海外での業績が選抜の評価対象となっていない現状を当事者が認識し、疑問を抱いているという事実である。そしてNo.15が言及していたように、帰国生入試には入試対策が必要とされているという事実である。

2点目は、統一筆記試験に関する批判である。例えばNo.15は、試験言語の観点から統一筆記試験という選抜方法に対して批判的な立場に立っていた。

結局(重要なのは)日本語(力)じゃないですか。帰国生入試も。(略) 結局日本語(力) なんだったら、「そっち(=海外)の勉強より受験勉強した方がいい大学に入れる」って(いう結論)になっちゃうと思うんで。(No.15)

帰国生入試による入学者数の上位20位の大学では、小論文や面接などの試験において、日本語が事実上主要な試験言語であるが(井田 2015)、彼の語りにある

ように、当事者からは、帰国生入試には言語面で「受験勉強」が必要であることが前提とされている。1点目においても、彼らにとって入試対策が必要だと認識されていることに触れたが、特に1990年代後半以降、帰国生当事者にとって「通塾」が常識となっているという(帰国児童・生徒教育の調査研究会 2012)。実際に、調査対象者の全員が、日本の「塾」に通って帰国生入試の入試対策に着手していた。つまり、帰国生たちは、海外での成績より入試対策に力を注ぐ方が有利だと判断し、そのために塾に通っていたことが読み取れる。

3点目は、面接試験である。No.5の場合、面接では「ざっくりした質問」であったこと、時間が短かったことから、入試において、「何を見るんだ?」という疑問が頭に浮かんでいた。ただし、他の対象者(No.4、19)が面接を肯定的にとらえていたように、面接の方法は大学(学部・学科)によって異なることがうかがえる。しかしここで着目すべき点は、実際に面接試験を受けた当事者が、面接方法に必ずしも肯定的ではない、ということにある。つまり「面接」という試験科目そのものよりもむしろ、「面接方法」に重点が置かれているのである。「実施要項」において面接は、小論文と同様、学力検査の代替策として位置づけられている。そして唯一、教員と直接話す試験科目でもある。そのうえで、当事者からは実際の「面接方法」に目が向けられているという事実、なんのために面接があるのかという疑問を抱いたという事実は、選抜方法として見過ごすことはできないだろう。

以上、本項では、帰国生入試の選抜方法に関して、①海外での業績、②統一筆記試験、③面接、の項目に分けて論じた。その結果、多様な教育経験と業績を有する帰国生の能力が統一筆記試験で測られるという事実や、選抜方法としての面接試験に対して、受験当事者から批判的まなざしが注がれていた。そして海外の業績よりも大学入試での統一筆記試験が重視されているために、塾での入試対策に力を入れる方が得策だと判断されていた。

次項では、統一筆記試験について、小論文・英語という試験科目に掘り下げて具体的に論じることとする。

(3) 筆記試験科目

日本の帰国生入試では、科目は各大学（学部・学科）によって異なるが、受け入れ大学のうち約82.1%の大学で統一筆記試験が実施される。そのうち、最も多い統一筆記試験科目が、小論文（約77.9%）、次が英語（約33.3%）である⁽⁸⁾。今回の調査でも、統一筆記試験のうち小論文、英語、について言及がなされていた。

1) 小論文

今回の調査では、小論文が試験科目として設定されることについて、能力の観点から肯定的にとらえられていた。能力とは、具体的には、①習得すべき能力、②大学教育で必要な能力、に分けられる。

1点目の習得すべき能力として、知識と思考力が挙げられていた。

知識も、いろんなものを知るきっかけになるから必要なんですけど、「考える力」・（つまり、）「分析する力」、「考察する力」が大事（だと思います）。（No.12）

No.12は、習得すべき能力として、知識のみならず、「分析する力」や「考察する力」といった「考える力」、すなわち思考力を挙げて小論文試験は実施されるべきだという立場に立っていた。実際に、塾での集団授業において他の帰国生との議論を通して思考力の伸長を

自覚したという者もいた。（No.1、2、3）

2点目の大学教育で必要な能力として、日本語力が挙げられていた。

「英語能力」だけ長けていても「日本語能力」がそれに追いついてないと、（日本で教育を受けるためには）結局意味がない気がするので、（小論文が試験科目として）必要だと思うんですよ。（No.6）

このように、思考力や日本語力といった能力が、大学入試そのもののみならず、その先の教育を見据えても必要だという理由から、小論文は肯定的にとらえられていた。ただし、彼らの見方は、小論文試験そのものが能力の伸長を促すという見方ではなく、小論文の試験対策が能力の伸長を促すという見方であった。語りにおいて塾での出来事が挙げられていたように、入試対策の期間で個人個人の能力の伸長が実感できたことが、小論文という試験科目への好評価へとつながっていたのである。

2) 英語

帰国生入試における統一筆記試験のうち、小論文とは逆に、英語の試験に関しては、経験知の少なさから戸惑いを感じたという語りに限定されていた。具体的には、英語の勉強の仕方や入試で出される英文和訳と

<表6> 2. 帰国生入試への批判的視座 (3) 筆記試験科目 小論文

項目	語り	備考（質問項目）
習得すべき能力	なんか刺激になりますよね。議論の場があるじゃないですか。みんな意見を言い合ったりとか。で、人の小論文読んだりすると、「すごいなあ」と思ったりして。で、その人たちと、なんか同じ空間にいて、「そっから何が吸収できるか」ってなると、「こんないい機会ないじゃないか」ってなるじゃないですか。（No.1）	(8) 塾での授業について、どう（思う）思ったか。
	面白かったです。書き方とか表現の仕方じゃなくて、なんだろう、考えるきっかけみたいなものを、与えてくれたっていうか。例えばひとつのことにしても、「こういうこともあるよね。こういうこともあるよね。」って、ポンポンって選択肢を出されて。先生だったり、他の生徒の小論文だったり。そっから（考えを）深めるのは自分の仕事だし。「ああ、勉強って楽しかったんだな。」って（思いました）。（No.2）	(8) 塾での授業について、どう（思う）思ったか。
	ディスカッション、やっぱり小論文系の授業が多かったんで、誰かの書いた小論文をとりあげて、みんなでこう、つづいていく、っていう。わりと、面白かったですよ。ほんとためになりました。（No.3）	(8) 塾での授業について、どう（思う）思ったか。
	知識も、いろんなものを知るきっかけになるから必要なんですけど、「考える力」・（つまり、）「分析する力」、「考察する力」が大事（だと思います）。（No.12）	
大学教育で必要な能力	英語能力だけ長けてても日本語能力がそれに追いついていないと、結局意味がない気がするので、英語も小論文も両方必要だと思うんですよ。（No.6）	

＜表7＞ 2. 帰国生入試への批判的視座 (3) 筆記試験科目 英語

項目	語り	備考(質問項目)
経験知	帰国生って、英語を「勉強する」っていう姿勢で勉強したことがほとんどないですからね。(笑) かえって、どうすればいいか分からないんです。(No.2)	(8) 塾での授業について、どう(思う)思ったか。
	文法(の授業)で、「SVとか、私わかんないわ。」って。「SVとか勉強したことないし。」って。だから、和訳とかも、適当でしたよ。(笑) 感覚とか雰囲気で、「これ、こうかな?」とか。和訳、大嫌いでした。受験のためだったけど。・・・なんか、ツラかった・・・。(No.8)	(8) 塾での授業について、どう(思う)思ったか。
	日本語ができないうです。日本語から英語の方が比較的やりやすいんですけど、英語から日本語が、めちゃくちゃ難しいんです。英語の文は読んで理解はできるんですけど、それを日本語に直すってなると、「この部分をどうくっつけて、日本語に直したらいいのか」とか、「日本語でどう表現したらいいのか」とか。英語では理解できるけど日本語にできない、っていうのはありますね。(No.7)	
	高校までは(語彙を)英英(=英語を英語で理解する方法)で(習得していま)すから・・・和訳になるとほんとと苦手でした。(No.11)	

いう設問形式に対する戸惑いである。

帰国生って、英語を「勉強する」っていう姿勢で勉強したことがほとんどないですからね。(笑) かえって、どうすればいいか分からないんです。(No.2)

高校までは(語彙を)英英(=英語を英語で理解する方法)で(習得していま)すから・・・和訳になるとほんとと苦手でした。(No.11)

英語試験に関する語りには、こうした戸惑いのほかに、設問の改善案が提示されていた。これらは次節で詳述することとする。

以上、本節では、分析結果として大別した2項目目、「帰国生入試への批判的視座」について、(1)入試システム、(2)選抜方法、(3)筆記試験科目、に類型化し、帰国生の語りとともに順に論じた。(1)入試システムにおいては、出願資格や経験によっては、受験生に不利な影響を及ぼしうること、そして「排除」が起こっていることが明らかになった。(2)選抜方法では、海外の教育経験の多様さや業績よりも統一筆記試験結果が合否に影響するため、塾での入試対策が必要だと判断されていた。(3)筆記試験科目では、小論文試験そのものよりむしろ、塾での能力の伸長という観点で肯定的まなごしが注がれ、英語については経験知の少ない出題形式であるため戸惑っていたことが明らかになった。

以上の語りから、帰国生入試に関する現状と課題が

浮かび上がったなかで、改善案を提示した語りもあった。次節では分析結果の3点目として、当事者による帰国生入試の改善案を整理することとする。

3. 帰国生入試における改善案

本節では、今回の調査での語りで提示された帰国生入試における改善案について、①入試で測る能力の再検討、そして入試のみならず進学後を見据えた案として②大学への進学準備体制の整備(補習等)、に分類している。

まず1点目の入試で測る能力の再検討として、英語の統一筆記試験に関する改善案が挙げられていた。特に経験知の小さい英文和訳について、例えば長文読解力を測るためには英文和訳は「いらぬ気がします。」(No.7)という語りや、先を見据えると、英文和訳より和文英訳の方が「自分の意見を(英語で)すらすら言うためにも、ためになると思う」(No.6)という語りがあった。英語の試験のうち英文和訳という設問への批判のもと、こうした和文英訳という打開案は、英語力の測定方法の妥当性や伸長という観点から提示されていることが分かる。

2点目、大学への進学準備体制の整備(補習等)については、入学後、日本の教育を受けてきた他の学生とともに学ぶことを想定した改善案である。例えば、No.14はある大学の事例、No.12は自分自身の経験から、補習授業を提案していた。

＜表8＞ 3. 帰国生入試における改善案

項目	語り
入試で測る能力の再検討	英文和訳よりは和文英訳の方が、その後のためになるという印象はあるんですけど。たいていその、(英語で)誰かと話をしているときに、いちいち頭の中で正式な言葉には直さないじゃないですか。感覚で受けて。「考える」っていったらどっちかっていったら自分から喋るときなので、「英訳の方が、自分の意見をすらすら言うためにも、ためになるんじゃないかな」と思うんですけど。「和訳がためになるのか?」と言われると、微妙ですね。(笑) (No.6)
	(入試で和訳問題は) いらな気がします。(文章の内容を) 理解できていたら、問題ないじゃないですか。(笑) 人に伝えないといけない場面とかだったら、必要なかもしれないんですけど、自分の中で完結できるんだったら、いらなと思います。(No.7)
大学への進学準備体制の整備(補習等)	<p>●大学(経済、法、商)は、内定した人に対して、数学の補習授業があって。(出席は) 任意なんですけど、お金とって、週に1回とか。それはいい仕組みだなって思うんです。みんなで数学の勉強を日本語でし直すわけだし、数学は必修科目になるし。それで単位落として進学できなかったらかわいそうじゃないですか。(No.14)</p> <p>一般入試の人よりも劣等感を感じますよ。帰国生の弱点はやっぱり知識ですね。入ったらもう一般で入ってきた子と一緒にやんなきゃいけないじゃないですか。先生たちも、「知ってる」っていう前提で話をするんで。でも帰国の子は日本史なんて、現地校行ったら絶対やらないですよ。自分で勉強しない限り。そこまで余裕なかったの。大学入ってから苦労します。(略) 帰国生(の受け入れ)を存続させるなら、補習みたいなのをやってほしいです。大学の授業を受けるのに必要な(知識習得のために)。(No.12)</p>

数学の補習授業があって。(略) それはいい仕組みだなって思うんです。みんなで数学の勉強を日本語でし直すわけだし、数学は必修科目になるし。それで単位落として進学できなかったらかわいそうじゃないですか。(No.14)

帰国生(の受け入れ)を存続させるなら、補習みたいなのをやってほしいです。大学の授業を受けるのに必要な(知識習得のために)。(No.12)

これらはいずれも、日本の教育を受けてきた学生と授業を受けるにあたり学業面で不利にならないよう考慮した策であると言える。特に前者はすでに実施されている事例をもとにした提案であることから、補習授業には意義があるとみなされていることが分かる。

以上、本項では、帰国生入試の改善案に関して、2項目に分けてそれぞれ論じた。

次章では以上の分析結果をまとめうえで、本研究の意義ならびに限界を論じたい。

Ⅲ 本研究の意義と限界

本稿では、日本の大学入試が多様化しているなかで、海外就学経験者を対象とした入試の現状を、受験当事者の目線からどう捉えられているのかを明らかにするため、帰国生を事例としてインタビュー調査を実施した。その分析結果を以下にまとめておきたい。

今回の対象者は、その全員が、帰国生入試は必要だという立場に立っていた。そこからさらに語りの内容を分類したところ、1.「帰国生入試が必要である理由」、そして帰国生入試自体は必要ではあるものの改善の余地がある点や困った点などを指摘した語りとして、2.「帰国生入試への批判的視座」、そして3.「帰国生入試における改善案」とに大別された。

1.「帰国生入試が必要である理由」では、教育体制の差異、言語力、評価方法、教育体制の類似、に細分化したところ、帰国生入試は、教育体制のちがいや言語力の面から救済策として当事者から求められているとともに、小論文や面接の評価方法、論述という試験方法といった点で肯定的にとらえられていることが明らかになった。

しかし他方で、帰国生入試自体は必要ではあるが、より具体的に吟味したうえでの批判も挙げられていた。それが、2.「帰国生入試への批判的視座」として類型化した、(1)入試システム、(2)選抜方法、(3)筆記試験科目、である。入試システムが帰国生当事者に対して有利・不利な状況や「排除」を引き起こしうること、海外の業績よりも大学での統一筆記試験が選抜方法として重視されていること、筆記試験科目のうち小論文には思考力や日本語力といった能力の伸長の観点から肯定的な視座が投げられていたが、英

語には日本の試験形態への経験知により戸惑いを生じさせる試験だということが明らかになった。そして、これらの現状から、帰国生入試には塾での入試対策が必要な入試だと当事者によって判断されていた。3. 「帰国生入試における改善案」では、能力の測定方法や入学前の補習授業が提案されていた。

以上の結果をもとに現在の帰国生入試の実状を俯瞰することで、まとめとしておきたい。それは、帰国生入試は当事者にとって必要とされているものの、受験する際には入試対策が必須であること、そして入試対策のために塾に通うことが前提とされているという事実である。

帰国生入試は、当初の救済策という対応措置から、入試の多様化、国際化・グローバル化といった国内での入試改革の影響を受けてきた入試である。実際に対象者にもAO入試による進学者がいたように、帰国生にとって出願先の選択肢が広がったことは事実である。しかし、日本の大学を受験した当事者からは、進学先を確定させるためには、海外の業績のみでは不十分だと判断されていた。そのため、統一筆記試験で測られる能力を伸長させることを目的とし、塾に通うという判断に至っていた。救済策、入試の多様化、国際化・グローバル化政策によって多様な選抜が実施されている一方で、海外就学経験者の当事者というマイクロレベルでは、日本の大学進学のためには、海外の公的学校教育のみならず、別途、日本の塾という私的教育において入試対策を要する入試なのである。

最後に、本研究の意義と限界を述べたい。意義の一点目は、当事者からも海外での業績が入試で重視されていないと認識されていた点にある。帰国生入試に関する先行研究では、大学(学部・学科)による出願資格の分析から指摘されていたが、実際に受験した当事者も同様に海外での業績が重視されていないと感じ、それを疑問視していることが明らかになった。意義の二点目は、帰国生が入試対策のために塾に通っている背景を明らかにしたことにある。これまでの研究では1990年代後半から「通塾」傾向が見られることが指摘されてきたが、本研究では、統一筆記試験があること、そしてその試験言語、出願形式の経験知への不安

といった具体的な背景が見いだせた。

しかしながら、大学教育の改革やグローバル化への対応策により状況は変化し続けることが予想される。今後も引き続きマイクロレベルでの調査から、海外就学経験者の大学入試の現状と課題を明らかにする必要があると考える。

【脚注】

- (1) 本稿での「海外」とは、日本の学習指導要領以外のカリキュラムが採用され、かつ、教授言語が日本語以外である教育の総称を示すこととする。よって、在外教育施設は含めていない。
- (2) 以下、国際バカロレア・ディプロマプログラムもしくはその資格の総称として、「IB」と表記する。IB入試は、岡山大学(2012年度以降)等で実施されている。
- (3) 1975年、文部省によって有識者17名による「海外子女教育推進の基本的施策に関する研究協議会」が構成され、1976年に公表された報告書が、その後の施策に大きく影響を与えたという。(中西晃「国際化時代の帰国子女教育」『共生社会の教育』帰国子女教育研究プロジェクト(中間報告)1993 東京学芸大学海外子女教育センター 35-52頁。)
- (4) 自由民主党文教制度調査会・文教部会・外交部会「海外子女教育と帰国子女受入措置について」(昭和53年6月14日)1978等。
- (5) 大学審議会「大学入試の改善に関する審議のまとめ(報告)」(平成5年9月16日)文部省高等教育局『大学審議会答申・報告総覧：高等教育の多様な発展を目指して』ぎょうせい 1998 265-266頁。
- (6) 産学連携によるグローバル人材育成推進会議「産学官によるグローバル人材育成のための戦略」(平成23年4月28日)2011 3-7頁。
- (7) 朝日新聞出版社「入試：帰国生徒ランキング」『2014年版 大学ランキング』2013 70-71頁。
- (8) 海外子女教育振興財団『帰国子女のための学校便覧2012』に掲載されている312大学(国立59・公立30・私立233大学)の入試要項データに基づいている。

【引用文献】

- 井田頼子「帰国生の大学進学」『平成23年度 学校教育高度化センター 学内公募プロジェクト報告書』東京大学教育学研究科附属学校教育高度化センター 2012 91-99頁。
- 「帰国生は「能力シグナル」をどのように認識するのか：塾での大学入試対策に着目して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』(53) 2013 19-29頁。
- 「日本の大学の帰国生入試における多様性とその帰結：『能力の社会的構成説』を参考に」『ソシオロギス』(2015年9月刊行予定)。
- 稲田素子「大学入学選抜における帰国生入試の現状と特質」日本教育社会学会第63回大会要旨 2011。
- 帰国児童・生徒教育の調査研究会（編著）『帰国児童・生徒教育に関する総合的な調査報告書』海外子女教育振興財団 2012。
- 佐藤郡衛「帰国生徒の受け入れと特別入試の意義と課題：『積極的差別是正策』の視点から」『国際教育評論』東京学芸大学国際教育センター 2005（2）76-89頁。
- 『異文化間教育：文化間移動と子どもの教育』明石書店 2010。
- 高崎禎夫「帰国子女の入試状況」『大学入試研究ジャーナル』第3号 国立大学入学選抜研究連絡協議会 1993 81-82頁。
- 西村俊一（編著）『国際的学力の探究：国際バカロレアの理念と課題』1989 創友社。
- 細尾萌子「フランスのバカロレア試験における評価観：問題作成と採点に関する議論の歴史的検討を通じて」『京都大学大学院教育学研究科紀要』2010（56）387-399頁。
- 松原達哉「日本の大学にもっと帰国子女受け入れ拡大を望む」『海外子女教育』1980（85）22-23頁。
- 宮島健次「イギリスにおけるカリキュラム2000によるAレベル試験制度改革の問題と動向：2002年度のGCE試験を手がかりに」『関東教育学会紀要』2003（30）81-92頁。
- 望田幸男『ドイツ・エリート養成の社会史：ギムナジウムとアビトゥーアの世界』1998 ミネルヴァ書房。

【謝辞】

調査にご協力くださった皆様に、心より御礼申し上げます。

The Tasks for Improving University Entrance Examination System in Japan: A Case Study of the System for Returnee Students

※ Yoriko IDA

[Key Words]

university entrance examination, specialized examination system, returnee students, ability, *Juku* (a private tutoring school)

[Abstract]

This article focuses on the university entrance examination system only for returnee students in Japan that has been conducted in the state level since the 1980's, and clarifies the present condition and the problems of it by semi-structured interview research: 21 returnee students (8 males, 13 females). It is revealed that this system is necessary to returnees because they have taken not exactly the same education as Japanese one. However, there are still tasks in the present entrance examination system; (1) the system could exclude applicants by qualification to take the examination by whether they went abroad by their parents' job matter, studied in foreign countries over 2 years, or/and finished high school geographically not in Japan in spite of curriculum, (2) in terms of selection, universities tend to put more importance on the results of its own unified-test such as essay writing in Japanese, or translating English reading passage into Japanese than educational evaluation in high school. Because returnees' educational experiences are various, returnees go to *Juku*, a private tutoring school, to prepare for passing the exam more effectively. The result shows the reason why the number of returnees who study at *Juku*, before examination has increased recently.

※ The Graduate School of Education, The University of Tokyo